

「自ら考え、課題を解決できる児童の育成」

～つながりあい、学びあう少人数での学習集団づくりを通して～

I 研究内容

1 研究内容と方法

(1) 研究内容

- ・ 少人数や小集団での効果的学習方法を取り入れた授業実践および授業公開の実施
- ・ 昨年度までの実践を踏まえた上での CPDA サイクルを活用した授業改善の取り組み
- ・ 一人一実践の取り組みは継続して行う
- ・ 児童の実態把握（NRT 検査・Q-U）と K-13 簡易法を用いた Q-U での学級づくり
- ・ 学びを促す家庭学習での環境づくり

(2) 研究方法

- ・ 全職員の共通理解を図るために、全体研究会を中心に研究を行う
- ・ 外部講師を招いて、少人数における児童の効果的な授業法などの理論研究を行う
- ・ 各自、授業公開を行うと共に、授業改善についての研究を行う
- ・ NRT 検査や Q-U テストを使い児童の実態を把握し、それを様々な場面で生かす

(3) 検証方法

- ・ 2 回のアンケートと Q-U での数値面での評価
- ・ 授業実践での児童の様子、児童のノート等の記述

2 研究実践

(1) 理論研究

◇ 「少人数を生かした指導法」

講師 小田切 武（県指導主事）

(2) 実態調査

① NRT 検査の分析（5 月）

各学年・各教科ごと、学年平均と全国平均を出し、今年度特に力を入れて指導すべき内容を明らかにすると共に、どのような手立てを講じていくのかを検討。

② 学習・生活アンケートの実施（5 月・2 月）

昨年度からの学びあいに関する 8 つの項目に加えて 4 項目の児童の家庭での学習の様子などを加えたアンケートを製作し、5 月と 2 月に実施した。5 月の結果を受けて各クラスで取り組みを行った。2 月には、比較の分析を行い、成果の確認と今後の課題を探る資料とした。

③ K-13 法簡易版による Q-U 検査の分析（6 月・12 月）

4 月と 11 月に行った Q-U 検査の結果を受け、学年ごとに K-13 法簡易版を用いてそれぞれに分析を行った。また全校のプロット図を作り、全職員で児童の共通理解を図り、今後の指導にあった。

(3) 授業実践

ア 研究授業

- ・ 第 1 学年 武井 奈穂教諭 国語科 「くじらぐも」
- ・ 第 5 学年 荒井 祐貴教諭 社会科 「工業生産を支える人々」

イ 授業公開（一人一実践）

- ・ 第 2 学年 廣瀬 尚子教諭 道徳 「オレンジ色のおいしい木の実」
- ・ 第 3 学年 川野 和昭教諭 国語科 「ちいちゃんのかげおくり」
- ・ 第 4 学年 藤原 仁美教諭 国語科 「アップとルーズで伝える」

- ・第6学年 小林由紀子教諭 社会科 「戦争と人々の暮らし」
- ・教務主任 土屋 弘明教諭 4年理科 「自然のなかの水のすがた」

(4) 日常的な取り組み

学年に応じた、系統的な学習規律を確認し、それを「大藤小スタンダード」として徹底を図った。学習用具の準備から使用するノートの目安等、各家庭へ周知を図るとともに、子どもたちが自分たちで意識できるよう学級掲示等に加え、個人用のファイルも作り6年間持ち上げて使用するようにした。

II 研究内容

1 成果

- (1) 学習会を通して少人数での学習指導の基礎を学ぶことができた。さらに、少人数と小集団を区別して取り組んだことで違いが明確になった。
- (2) 全員が一人一実践に取り組み、お互いの授業を見合うことができた。
- (3) NRT 検査の結果を数値化し、学力分析をていねいに行うことで、授業実践・授業改善に役立てることができた。
- (4) 昨年度までの学習アンケートに加え、今年度から生活アンケートも実施することにより、子どもたちの思いや家庭での学習時間や習い事などの様子も知ることができた。そして、それを研究に生かすことができた。特に、今年度力を入れた「自主学習」の様子が数値として表れた。
- (5) Q-U 検査についても甲州市の確かなプロジェクトと連携をして、全職員で全校児童に対して分析をして、きめ細かな援助を全員で取り組み、成果が上がった。
- (6) 子どもたちの「つながりあい」や「学びあい」に焦点を当て、ペア学習・小集団少人数学習を意図的に仕組み、課題解決をする力を育成するという点について研究授業を中心に実践し、効果を検証することができた。
- (7) 家庭学習では、副主任を中心に研究を進め、各学年の様子を発表しあうことで良い環境づくりができた。児童のアンケートでも 勉強時間が増えているので取り組んだ成果もあがっている。質の向上も見られた。
- (8) 一人一実践を通し、お互いの授業を見せ合うことで、多くの刺激や学びが生まれた。また、それぞれが自分の授業を見直すよい機会となった。
- (9) 学習規律について、学年の発達段階を加味しながら統一されたものを作ったことで、毎年どの学年を誰が受け持っても「大藤小スタンダード」として徹底できるようにすることで全職員が同じ歩調で指導できるようになった。

2 課題

- (1) 今後は、小人数がメインの研究になってくるのでさらなる研究や理論の構築等が必要になってくる。
- (2) 一人一実践については、位置づけや日程の調整、方向性が研究主任の方で明確ではなかったので今後、早めに日程を調整し、全職員の確認のもと取り組む必要がある。
- (3) Q-U の分析では、河村先生も取り組んでいच्छるように少人数での Q-U の生かし方を今後研究していく必要がある。特に、本校の課題でもある。
- (4) 学習規律については今後も「大藤小スタンダード」として徹底を図り、それを維持していかなければならない。家庭学習については、統一事項の確認などさらなる前進を考えていく必要がある。

III 成果物

- 1 研究授業及び公開授業の指導案
- 2 学習・生活アンケートデータ（2回実施）
- 3 NRT 検査の分析結果（2～6学年）
- 4 Q-U検査の分析結果、アタックシート、各学年 Q-U 表（2回実施）
- 5 全校プロット図（2回分）と指導の確認

（研究主任 川野 和昭）